

クオリアの絶対的一人称性の謎

鈴木 敏 昭

Mystery of the 'absolute' first person aspect of qualia

Toshiaki SUZUKI

ABSTRACT

The purpose of this paper is to consider the mystery of the 'absolute' first person aspect of qualia, or the senses. The 'absolute' first person aspect of qualia entails that senses can be actually felt only in a specific body (the present writer in this case), and cannot be shared with any other body, although any body could say the same thing from their own perspective. The basis of a solipsistic perspective (absolute uniqueness) of the 'I' phenomenon (fundamental agent of a personality) is the absolute first person aspect of qualia. According to the role theory, personalities are formed from interactions of the subjective ego ('I') and the social, objective ego ('me'). This 'I' element, coming from original sensitivities, has characteristics of qualia. Neurological mechanisms of the emergence of qualia must be identical in every body. If this were true, how could specific qualia, that is, real actual feelings, be felt uniquely and only in a specific body (the present writer in this case), and not in other bodies. What is this special 'actual feeling switch' that brings this actual sensory uniqueness to my body. If this switch would be turned on by chance, what kind of a chance could it be? If it were completely by chance, it could be possible that this switching on would emerge in more than one body at the same time. However, this is contrary to known facts. The mystery remains unresolved.

KEYWORDS : Qualia, Sense, Harder Problem, Absolute First Person Perspective

第1章 自己の「各自」性の謎とクオリアの謎の関連

1. 「なぜよりによって<この肉体>が<私>だったのか？」

意識の「高次」の在り方が「自己意識」であろうし、そのような「自己意識」によってしか、主体についての問いは生じないであろう。

とりあえず人間的自己に関して、「いかにして脳が意識を生み出すのか」が意識の難問 (hard problem) であるとすれば、「いかにしてあの脳でなく、この脳の生み出す意識が私の意識であるのか」が意識の超難問 (harder problem) である (足立ほか, 2001)。確実に意識があるとわかるのは自分自身だけである。私たちは他人も意識を持っていると思っているが、確認はできない。外的な振る舞いに基づく類推である (原初的な共感なども含めて)。他人たちはいわば「チューリングテスト」に合格しているだけなのかもしれない (茂木・田谷, 2003)。

すべての脳 (肉体) に等しく認められる機能上の特性の内容とその脳 (肉体) の中の1つが自分の脳 (肉体) であるという事実は論理的に独立している。ある脳が自分の脳であるということの原因を脳の持つ普遍的な特性の中に求めることは原理的に不可能である, という見解もある (足立ほか, 2001)。つまり「なぜよりによってこの肉体が (あの肉体ではなく) <自分>であるのか」という「各自」性の「謎」である。ここで言う「各自」性とは「一人称」性と同一ことであるが, 下等な動物にもあるかもしれないので明確な自己意識の成立は必要ないと考えられる。つまり「自己」が成立する以前の各「個体」に固有の現象ということである。ただし<この私>という「絶対的一人称性」の謎を意識するのは高度な自己意識の産物であろう。

さらに「各自」性 = 「一人称」性とは他人にその体験内容を伝達できない (言語化できない) という面より, その体験の個別性の「謎」の方が重要である。詳しくは鈴木 (2011) を参照のこと。

2. <この私>の謎 (Harder Problem) を解く鍵としての感受性・クオリアの謎 (Hard Problem)

心理現象の根本性格は意味を読みとるという記号的性格である。すなわち物質的現前の中に現前しない何かを感じる働きである。それは単なる因果系列ではない。反応の連鎖ではないはずだ (反応の前に感受があるはずだ)。なぜなら、それだけでは感じる主体がどこにもないからである。感覚・感受性は心理と生理の接点にあるのだろうが、生理のどこに感じる主体が現れるのだろうか。いずれにせよ、「意味を読みとる働き」がそもそもそれぞれの「主体」でしかありえないということが重要である。だから意味の解明とはむしろ意味を読みとる主体 (意味の手段・媒体ではなく) の解明と言ってもよいのではないか (主体と体験そのものの関連は後述)。そしてその源は感覚 (感受性) にあるのではないだろうか。さしあたってここで「主体」とは「自己意識」とは限らない。感じる働きそのものと言ってもよいであろう。すなわち感覚や経験と独立に主体を設定しているわけではない。感覚することは主体と不可分である。

「リアルな感覚を感じる」という絶対的一人称性の感覚を持つ肉体が<自分=私>という存在になるのである。

人間の高次の自己意識において「この私」の謎 (Harder Problem) が生じるとされる。他にもない「この自己」の「各自」性=固有存在性は一般的な (つまり誰にでも共通する) 自己意識の構造論では捉えられない。ここではその個性性こそが問題なのである。そこで1つの解明の方向として自己意識の起源に遡って、そこにある「各自」性の源を探ることである。自己意識はどのように成立してきたのか。大まかな枠組みとして「I」と「me」という役割理論的な「自己の二重性」から捉えることができよう。それによれば、「自己」とは取り入れられた社会的役割の統合なのである。では社会性を取り入れる (同一化) 以前の乳児期の「自己」の源は何か。それは「I」と呼ばれる原初的な身体感覺的な未分化な感受性 (情動・衝動) であろう。それは原初的なクオリアの一つと言える。ここで問題にする

感受性とは役割理論的にいうなら、「me」(役割) をすべて脱ぎ去って (理論上は) 残る「I」の部分であろう。それはまたワロン (Wallon) の言う情動的姿勢緊張のような身体的感受性やさらにラカン (Lacan) の「主体」とも関連しよう。

自他分化した後には意識内容と自己と一緒に働くが同一のものではない。何かに没入しているときは我を忘れて対象を意識している。さまざまな心的機能にアクセスしている自己は観察者としての自己である。それは James が「I」と呼んだものである。それは脳における「パターン認識者」とも言える (Baars, 1997)。

原初的一体性から出発して、自他が分化し、主体の最も抽象的概念的レベルである「自我=自己意識」が成立していくのであろう。クオリアの質感は「一人称」性と不可分である。従って「自己」の「独我」性=「各自」性の問題の基盤にはクオリアの「各個」性の「謎」があると思われる。つまり前者の謎を解く鍵が発生的な意味で後者にあるのではない。クオリアもある意味で James や Mead が言う「I」に相当すると言えようが、その「I」=「感受性」の「各個」性 (「絶対的一人称性」) は依然として謎のままである。

クオリア=感覚が生まれるということはそれを感じる「主体」を想定することになる。だからクオリアは<私>の原点の意味を持つ。<この私>の意識の源を考える上で、感覚・感受性のしくみを解明することは1つのポイントになるのではないか。「自分」に気づく前にあったと思われる「この感覚」の「この肉体」で生じるしくみは何か (なお<私>と<>で表示する場合は原則として唯一この筆者の絶対的一人称性を指す。「私」など「」で表示する場合は各人が持っているであろう一般的な一人称性を指す)。

そして身体 (生理) から心理へのこの移行は「この肉体で」という「各個」性と一体のものと思われる。そしてここでも「この自分」と似たような、感覚の「独存性」の問題が生じる。感じるというのは必ず特定の1つの身体においてしかなされない。同じ主体がこの身体でもあの身体でも感じるというこ

とはできない（異肉体同時感覚不可の原則）。では、なぜあの身体ではなく、よりによって、この身体で感じるようになったのか。偶然だとしてもそれはどういう偶然かという問題がこのレベルでも生じる。

筆者はとりあえず「この私」の謎の解明をクオリアの謎の解明が鍵になるという立場で検討を進めていきたい。

第2章 クオリア発生のしくみ

1. 理解の基盤としての一人称の実感

何事も言語で記述すると「一般化」されてしまう。個別性は実感するしかない。しかも一人称的な「実感」が究極的には「理解」という活動の出発点にある。一人称的な「実感」を三人称的に記述することはできないのである。

主観とは何か、クオリアとは何かということは、言葉で説明し、理解しても、実体験＝実感しないと「了解」できないということと関連しているのかもしれない。クオリアのリアルな実感、後述する「絶対的」一人称性は実感しないと分からない。他人の感覚・実感は二人称・三人称的に予想するしかない。クオリアは「外」からは見えない。各自がいわば「内」で感じるだけである。

2. リアルな感覚＝クオリアとは何か

(1) 主観とは何か、感覚主体とは何か、クオリア（リアルな感覚）とは何か

主観とか感覚・クオリアとかは物質的世界においてそこに現前しないものを何らかの形で「解釈＝読み取る」働きであろう。出発点としての心的現象にまとわりつく「思い込み」や「臆見」を判断停止により排除して、「純粹」な現象に至るとしても、それらの心的なものはそもそもどこからどのようにして発生したのか。この発想自体がすでに「還元論」的であるのか。クオリアなどの主観の発生を脳神経系など物質的基盤から完全に切り離して考えるということは何らかの「汎心論」になるのではないか。例えば、脳神経系は細胞レベルでの感受性の増幅装置であり、生命の基盤である細胞は分子レベルの感

受性を体制化したものかもしれない。すると物質レベルに極めてプリミティブな感受性もともと備わっているのかもしれない。しかもその感受性は物質と同様に「独立ではない」としてもこの世界に「元から」存在するものなのかもしれない。

(2) 結局、「真にリアルに」感覚＝実感するとはどういうことか。その仕組みにこそ絶対的一人称的感覚の謎を解く鍵があるのではないか。「真にリアルに実感している」という表現もまだ言語表現であるため、一般的意味を持ってしまっている。

絶対的一人称性感覚とは実際に「ボン！」という音が聞こえ、「ピカ！」という光が見え、「痛い！」という体験など、あの実際の感覚そのものを指す。しかもそれはある特定の1つの肉体（ここでは筆者）で感じるしかない。主体特定の（一人称）であるこのリアルな実感とは一体どういうことなのか。一人称の「真にリアルな実感」とは、いわば「内側」から感覚すること、「我がこと」として引き受ける実感、唯一の真のリアルな感覚主体の成立とでも言えようか。これではまだなんの説明にもなっていないが。

(3) 「ハードプロブレム」としてのクオリア

クオリアについては「イージープロブレム派」と「ハードプロブレム派」の大きく2つの立場があると言えよう。前者は基本的に心を脳に還元する立場であり、クオリアは解決不能な問題ではなく、脳の解明がもっと進めば、解決されるはずだと予想している。後者は脳（物質）と心は全く異質な存在であり、原理的に脳（の活動）に還元することはできないとみる立場であり、心の計算不能性論（量子脳理論）、不可知論、汎心論、情報二面性論などさまざまな見解がある。詳しくは鈴木（2008）を参照のこと。

永井によれば、脳内の物質的過程からどのようにして主観的感覚が生じるのかは永遠に解明されない謎である。なぜなら脳と感覚・心との関係は外的な関係で、偶然的で仮説的な関係であり、感覚・心にとって脳神経系は不可欠とは言えない、と言う。表

情や動作や発言の方が感覚・心と内的な関係にある。つまり必然的關係と言っている(永井, 1995)。しかし脳と心は外的で偶然的な関係と考える論拠, 従って意識の神経相関(NCC)の蓄積をいくら重ねてもクオリア・心の発生を明らかにすることはできないという説得的な論拠をもっと詳しく言うべきであろう。もし感覚という主観が脳神経系とは独立の現象だとするなら, 主観の感覚とは一体何で, どのようにして生じたのか。

現象学的接近も脳生理学的にはクオリアは原理的に説明できず, 事実そうなっているとしか言えない(大森(1980, 2015)の「立ち現れ」説など)という意味でクオリアに謎はないとするイーゾープロブレム派の見解やハードプレブレム派の不可知論的側面を持つ見解などがあり, 筆者はまだ把握し切れていない。現象学的接近は意識経験の還元不能性から出発する。メルロ＝ポンティに従うなら, いわゆる「クオリア」は運動性格や生命的意味と不可分であるから, それを実現している身体や世界の在り方から, すなわちその身体的な「世界内存在」性から切り離して考えることはできない。生理学的な客観的身体の概念では分子や細胞の組織にいかにして意味や志向性が生み出されるのかは決して了解されえないということになる。生理学的組織の集合としての身体なるものは「生きられる身体」という始元的現象から出発して, それを貧弱化したものなのである。メルロ＝ポンティの言う「生きられる身体」とは一人称的に経験される身体である。現象学と認知科学を架橋しようとする試みに神経現象学があるが, その作業仮説は経験の現象学的説明と認知科学の対応部分は相互に制約する関係にあるというものである。クオリア問題への現象学的接近は今後の検討課題である。

3. 主観・クオリアの脳神経学的基盤

(1) 脳神経学的研究の必要性

出発点の現象の還元不能性を唱える現象学的接近からすれば, クオリア発生の脳神経学的基盤を考えることは, すでにドクサ(臆見)に毒された還元論になるのかもしれない。しかし還元論のイーゾープ

ロブレム派とは一線を画しながらも, 脳神経学的基盤をとことん突き詰めていくことも必要だと思えてならない。感覚・クオリアが還元論としてではなく, 何らかの形で脳神経系から生じると一応仮定して探究することも必要ではないか。その上で, クオリアが脳神経学的構造からは説明できないことが立証できるのかもしれないが。

(2) 脳・神経系の構造から感覚・クオリアの主観はどのように発生するのか

心・意識と脳の活動との対応関係がさまざまな領域とレベルで調べられている。もちろん脳の特定部位のニューロン興奮がある意識・クオリアと相関関係にあるということはそれだけでは意識の発生の説明にはならない。

感覚とは内外の刺激を「肉体に知らせる」働きと言えようが, 肉体の何にどのように「知らせる」のか。それはなんらかの「判断」機能を持つ主体であるはずだ。すなわちすでに「心的」なものであろう。それはどういうことか。

脳神経系の「どこ」で, どのようにして絶対的一人称的感覚・クオリアが生まれるのか。

視覚経路で見るなら, 図1(茂木, 1999)のように, ある時点で感覚・クオリアという主観が発生すると考えられる。

意識発生の「究極」場であるニューロン興奮とはイオンチャネルが開いて電荷イオンが流入することである。その際にニューロンの細胞膜にある受容体が刺激を感知し, 反応するのである。ニューロンに限らず, 細胞にはある種の感受性が備わっていると言える。細胞の分子レベルの感应性をニューロンは増幅する働きをするのであろう。反応するとは, その前提に感受することがあるのではないか。もしかしたら, そこにクオリアの根源があるのかもしれない。まだ全く未解明の謎である。詳しくは鈴木(2012)を参照のこと。

(3) ニューロンの活動の中で「心に見えるもの」と「心に見えないもの」が分けられる基準を明らかにすることが「私」=主観性の神経生理学的基礎を

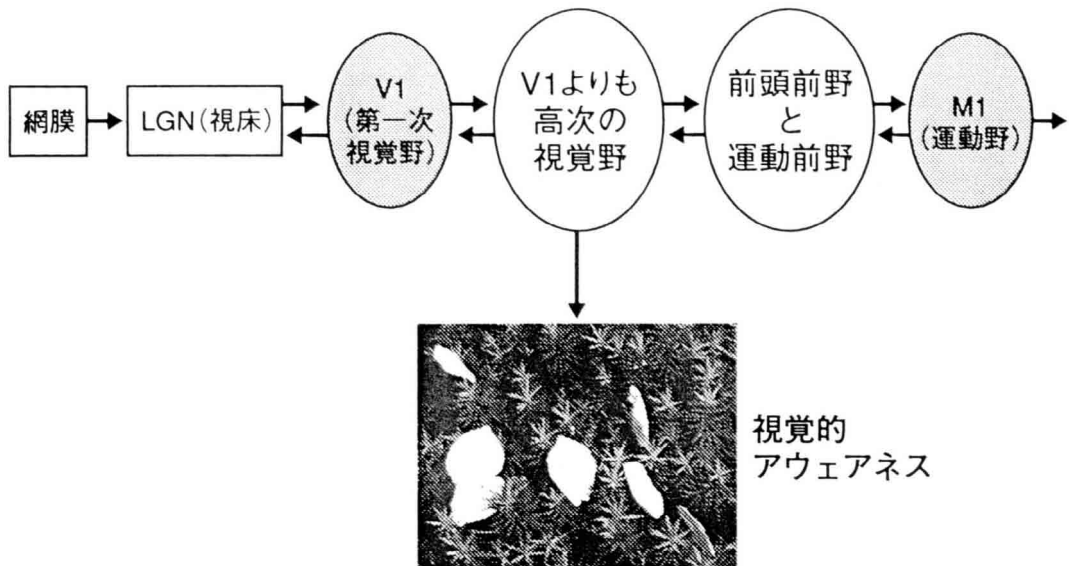


図1. 神経経路におけるクオリアの発生 (茂木, 1999)

解明することにつながる、と茂木は言う。例えば、両眼視野闘争では脳のニューロン発火としてはその視野にクオリアが用意されているのに「私」の主観には「見えない」ことが起こる。つまりニューロンの発火を「見る」という知覚にもたらず「私」の主観性が別のニューロン活動として必要ではないかと言う (茂木, 1999)。つまりニューロンの発火パターンとの関連はクオリアの発生の必要条件でしかない。さらにクオリアを感じる「私」の存在が必要である。これはなぜニューロンの発火にだけ意識が宿ることになるのかという困難な問題に通ずる (茂木, 1997)。ただし別のニューロン活動の設定は「ホムンクルス」問題のような無限後退をもたらさないのか。

人称化していなければ、感受性の個性の意識はないだろう。しかしそれでも動物のように感受性は存在している。自己意識成立以前の乳児における感覚・感受性はどうか。いずれも観察者からみたら、個別的である。

例えば、知性や人格の起源として Piaget や Wallon が問題にしたような感覚運動的活動や情動的姿勢緊張のような身体的感受性があると思われるが、そこにはいわゆるクオリアと同じ Hard Problem がある。

原初的な感受性・感覚はまだ未分化で局在性もな

く、通相性格を持っていると考えられるので、主体への「帰属」は意識の上では生じないであろうが、感覚である以上、感じているものがあることは確かなのではないか。「主語」はないとはいえ、何が感覚しているのかという問題は依然として残る。感覚という現象が主体そのものであるとすると (物質的基盤を問わないので) 汎心論になってしまうのではないか。

(4) 脳自身の視点 (First-Brain Perspective)

「私」というのは心を指すのではなく、各人の身体を反映する空間的中心を指す、という見解がある。‘First-Brain Perspective’は経験の内容 (First-Person Perspective) ではなく媒体に関わる。特定の経験を発生させるとはどういうことかに関わる。両者は存在論的には同一のものである。すなわち両者は同一の環境を、従って事象を指し示す。脳を単に物理的な脳として環境から切り離して見たのでは出てこない観点である。First-Brain Perspective は First-Person Perspective によってのみ間接的にアクセスできる。つまり脳のコードに対応した心のコードを見つけるという方法論によるのである (Northoff, 2004)。

(5) 神経興奮を「主観」＝感覚として感じる（いわば「内側」から感じる）こと、しかもリアルに感じるのはある特定の1つの肉体だけである。三人称的には各肉体がそれぞれに「リアルに感覚している」と言えるのだが、一人称として「リアルに実感」しているのはいずれか1つの肉体においてだけなのである。ここでは唯一筆者の肉体でのみなのだ。それはどのようにして決まったのか。ニューロンが発火し興奮した（これは各人に共通）瞬間に、感覚という主観が発生（三人称的には各人に言える）し、その実際のリアルな感覚の絶対的一人称化（＜この私・肉体＞のみ）が生じる。その瞬間に何が起きるのか。

第3章 クオリアの「各個」性＝絶対的一人称性の謎

I. 社会・関係性の中の心

自己や感覚を「よりによってどうしてこの肉体でか」の問いは心・感覚・クオリア・表象などを個人の内部（あるいは脳）に狭く閉じ込めた発想ではないかという意見も出てこよう。意識の主観性は主体の脳に依存するだけでなく、主体と環境の中での対象との関係またその関係の歴史にも依存している（Zelazo et al., 2007）。肉体は心と不可分であり、ある特定の文化・社会にすでに「取り込まれて」いることは言うまでもない。クオリアも含めた心の発生を他者との関係、文化的基盤、生態学的相互作用のもとで捉える必要がある。

＜私＞が＜私＞であるのは、＜私＞独りであり、＜私＞自身にとっては、＜私＞が人間性の唯一の原本（オリジナル）であって、視覚の哲学（サルトル？）が自他関係の非対称性を強調するのも当然である。しかし見かけがどうであれ、自他は互いに絶対的否定ではありえず、自我にとっての「対自」の特権が認められるためには、他人からの＜私＞への移行とその逆とがなければならない（メルロ＝ポンティ, 1989）。

しかしとりあえずは現象的体験的出発点あるいは気づきとして個的意識の「よりによって」性が可能

ではないだろうか。それが錯覚であるとか虚妄であるとか分かったとしてもその後のことではないか。筆者の本論での最大の関心はクオリア発生の仕組みそのものよりも、その「絶対的一人称」性の謎の「解明」にある。

II. クオリアと主体

1. クオリアの場所性

(1) 永井によれば、意識は述語となって主語とはならない。意識は対象化する場所であって、それ自体は決して対象化されない。西田のように意識の主格性を否定して、与格化して捉えるということは、つまり意識を場所として捉えることである。真の主語は（感覚主体などではもちろんなく）「この色」や「この感覚」ではなく、色という場所、感覚という場所であり、そこに働いているのは場所（述語的場）の自己限定の働きである、と言う（永井, 2006）。しかし述語的場とは一体どういうことなのかがよく分からない。

(2) 「個別の具体的感覚は特定の主観によって知覚されるときにのみ存在する」という Searle の主張は間違っている、という意見もある。痛みを持つことは痛みを知覚することではない。それは足が傷ついたということである、と言う（Bennett et al., 2007）。大森（1980, 2015）の言うように、傷ついたら、端的に「痛い」（立ち現れ）のであり、生理的事実と因果関係にあるのではなく、表裏一体の関係にある、という見解もある。

肉体の「どこ」が、どのように感じる（主観）のか、という問い方はすでに誤った二元論なのか。

2. 経験・感覚「そのもの」は二元論を止揚するの

河村は、経験こそ二元論を止揚する契機である、と言う。経験そのものは心的な素材からできていないので、両義的現象を内観によって捉えることはできない。経験は原初的所与として中性的である。つまり根本的には物的でも心的でもない、と言う（河村, 2007）。しかし経験はどうして心的ではないの

か。

経験する主体と経験内容（クオリア）の区別の前に経験そのものが成立している。ここで言う「経験そのもの」とはいわゆる「純粹経験」という意味ではなく、感覚主体の意識と感覚対象・内容（クオリア）の意識が未分化であることを指す。いずれにせよ感覚があるということは刺激と反応の間になんらかの媒介つまり原初的判断（選択）があるということであろう。下等動物の感覚はそれを意識していないという点では無意識的であろう。そして無意識は必ずしも機械的反応ということではない。

廣松によれば、触覚の場合は指先で対象を触知しているとも指先の状態を感受しているとも言えるので対象と主体つまり認知されるものと認知するものが未分化であり、渾然一体化しているとも言える。さらに杖を使って対象を触知している場合も同様のことが言える。視覚の場合も光線を伝える空間部が杖とアナログカルである。顕微鏡などを使用する場合はより類似性が高まる。つまり身体的主体の一部の伸張だと言えよう。従って視覚でさえ、認知されるものと認知するものは渾然一体的なのである（廣松, 1989）。

3. 禅の瞑想などでは自己意識は「拡散」し、ただ経験のみがあるような状態になるという。周囲の音なども（主体が）「聞く」のではなく、（ただ経験として）「聞こえる」という状態であるという。しかしその「聞こえる」という「純粹」経験も物質のように即自的に存在するのは異なる状態であろう。感じるという「主体」の働きには違いないのではないか。クオリアは主体と不可分であるというのは主体意識ということではなく、純粹経験であれ、感覚という主観的・主体的現象であるということである。

4. クオリア＝主体説

(1) 主体とは何か。それは主観およびその担い手のことであろう。主観とは何か。それは心的経験・現象のことであろう。心的とは何か。その原初的形態では感覚＝感じること＝感受性のことであろう。では感じるとは何か。それは現実＝物質界には実在

しないものを物質(?)が生み出すことであろう。ここで「生み出す」とは物質に還元することではないであろう。

(2) 一元論 (monism) によれば、クオリアは対象側にあるのでもなく、それと対比される意味での主体側にあるのでもない。主体はクオリアから構成される(知覚の束説)。両者は緊密にリンクしている。知覚は自己提示であり、それを感じる主体が別個に存在するわけではない。クオリアを持つことはそれを認知することではない(認知には必ず知るものと知られるものの二重性と関係性が含まれる)。両者は別個のことではない。純粹な経験(クオリア)は両者一体の非関係的なものである。感じることは知ることとは異なる。クオリアはそれが現れる仕方そのものである(自己提示)(Stubenberg, 1998)。経験そのものとその主体は分けられない。経験はその主体を含んでいる概念である(河村, 2004)と言う。これも経験は物的でも心的でもないという見解である。自己とクオリアは同じ硬貨の両面である。主体のない感覚やクオリアは存在しない(ラマチャンドラン, 2005)が、同時に経験があつて初めて経験をやる主体が存在しうる。この経験に必須のものは「厚みのある時間」体験である、という見解もある(ハンフリー, 2006)。

我々主体はクオリアを「持つ」のではなく、クオリアとして存在するのである。つまり認知的機能そのものがクオリアなのである(Clark, 1997)。経験自体が主体であり、それが何か経験とは別の得体の知れない実体(例えばホムンクルス)に提示されるわけではない。主体とは現象的諸特徴の総体にすぎない。経験の外部に主体がいるわけではない(Revonsuo, 2006)。しかし「経験自体」(ここでは感覚自体と言ってもよいであろう)とは何か。それは非人称的な感覚であろうか。それが主体そのものであるとはどういうことか。感覚自体と感覚内容は分離できないであろう。そういう意味で常に具体的な感覚だとして、それが主体そのものであるとはどういうことか。感覚(クオリア)(つまり主体)がその感覚(クオリア)内容を感じ(クオリア)自

体（つまり自分自身＝主体＝感覚自体）に自己提示するということであろう。しかし自己提示とはどういうことか。現象学的に「生きられる」感覚とでも言えるものか。

(3) クオリアは何か主体（ホムンクルスではないとしても）に対して存在するのであるから、クオリアと主体（自己）は同じコインの両面である。この主体とは一種の執行過程であり、前頭葉よりも視床下部や扁桃体などの辺縁系（limbic）の活動であろう、という見解もある（Ramachandran & Hirstein, 1997）。

(4) 自覚的対象的意識を排除したときに残る全身感覚は背景的意識として常に働いている。背景的意識は暗黙知に近い。それは生命の原理の現れである。すなわち生物の生きようとする力の現れである。本能も生命の原理の現れであり、背景的意識ともつながっている（唐木田, 2007）。生命の中にすでに意識されない暗黙知が存在するとしても、それは生命からどのように発生するのか。

5. 経験の主体をめぐる問い

(1) 経験の所有者、経験の主体がいるとするなら、その主体は経験を越えたものなのか、経験そのものから成るのか。もし主体は経験そのものとは異なるもの、それに還元できないものとしたら、主体は非物質的なものなのか物質的なものなのか。言い換えれば、心的現象は物理的現象とどういう関係があるのか。これらをめぐって心身問題の諸理論が展開されてきた（Maslin, 2001）。

(2) クオリア・経験の主体とは何か

(a) 主観とは一体何なのか。どのようにして形成されるのか。

主観的感觉（クオリア）が生じるということはイコールそれを感じる「主体」（肉体を基盤にしているだろう）がいることを、そしてそれが「その主体」のみに固有の感覚、つまり個別特異性が成立することを意味する。言うまでもなく、その主体が感覚を

意識化しているとは限らない。意識していない場合にはその感覚・体験に「埋没」していると言えよう。ここで固有とは「唯一」性を意味する。つまり絶対的の一人称性である。しかもその唯一性がすべての主体について言えるのである。

(b) イメージとは「主体」が「イメージしている」ということと同じことであろうが、その「主体」とは何か。

何かを感覚・知覚している、何かを考えている、何かをイメージしているなどは主観と言われるものであろう。それが自分に現象している、体験していると信じるのは「直観」であろう。他人にもそれらの現象があると信じるのも直観であろう。少なくとも日常の多くの場面でそう前提した行動をわれわれは取っている。

(c) 主観的经验のあるところには必ず主体が存在しなければならない（ハンフリー, 2006）。なおここで主体とは「自己」と必ずしも同じものではない。また経験とは独立に主体があることを必ずしも意味しない。

「赤のクオリア」が単独で存在するのではなく、「私が赤のクオリアを感じる」というように必ず「私」（主体）という視点と対になってクオリアは成立する。従ってクオリアを説明する理論は「私」の成立をも説明する理論でなくてはならない（茂木, 2001）。

(d) もし経験（感覚）が脳神経系を基盤として成立するものなら、経験の主体とは外界についての像を感受するものではないか。

記憶像のように後頭葉あたりの部位に、その記憶像の元になるものがあるのだろうか。しかしそれを像として「見る」のは、何かの「働き」としか言いようがない。

網膜に映った像を脳の中で「見ている」もの（ホムンクルスではないとして）は何か。

(3) 感覚を統括する実体としての「私の自我」があるのか（矢沢サイエンスオフィス（編）, 1992）。そうではないであろう。自己の表象はその人の物語的重力の中心であるが、それはフィクションであっ

て、実在はしない（デネット、1998）。

Ⅲ. クオリアの絶対的一人称性

1. クオリアの「私秘」性と「各個」性

(1) ギブソンによれば、知覚者全員が同じような情報を得る場合は公共的知覚を構成する。例えばある木の周りを知覚者全員が歩き回って同じ眺望を得る場合である。しかし自分自身の手を見る場合は各自は他の知覚者とはいくらか異なった眺望を得る。さらに自分の鼻の知覚は唯一無二である。さらにイメージは完全に私秘的である。知覚は環境の情報を得るのであり、独我的ではないが、感覚は私秘的である、と言う（ギブソン、2004）。しかしみんなが同じ木を見ている場合でも、各人のその木の感覚は私秘的である。他者の感覚を互いに直接感じることはできないという意味で私秘的である。つまりここで私秘的感覚とは各自の感覚体験の固有性を指すのであって、感覚対象が共有されているかどうかではないのである。また後述する感覚の「絶対的唯一性」とは単なる私秘性の問題ではない。

(2) 郡司によれば、クオリアとはタイプ（属性・概念）に対比されるトークン（個物化過程をも含めた個物）であり、個物であるがゆえに主観性・私秘性を持つ。ただしタイプとトークンを分離してしまうことは、クオリアがトークン（個別実感？）であり、モノそれ自体であるので科学的に理解すること、つまりタイプ（内観・概念）として認識することの不可能性として理解してしまうことをもたらす。タイプとトークンの共立、タイプに潜在する自己言及とトークンに潜在するフレーム問題とを付き合わせて互いに無効にする構想が必要である、と言う（郡司、2003）。

他の誰も私の痛みを感じないのは主体としての私だけがその痛みから（部分的にも）成るからである。私は主観的に痛みとして存在するからである（Clark, 1997）。しかしなんでよりによって他の肉体ではなく、その肉体で感覚することになったのか。というのは他の個体の感覚を「自分」の感覚としては感じるができないのだから。感じられる主観・

主体は一つだけのはずなのに、同様の主観・主体が多数いるのはどうしてなのかという問いとも関連する。

(3) 心的なものは常に誰かの心的状態である。その心的状態を持つ一人称つまり「私」が常に存在する。つまり一人称的視点こそが一次的なものである（サール、2008）。

意識はつねに誰かの意識である。これを“for-someone aspect of consciousness”と呼ぶ(Stubenberg, 1998)。クオリアはそれが属する経験の領野によって（例えば、私の経験であって、あなたのではないというように）個別化される（Rosenberg, 1997）。「キラキラ」というクオリアを感じる A さんの脳を完全に詳細に観察できる B さんがいるとしても A さんの感じているクオリアを直接知ることはできない。あるクオリアであることはそれを感じる主観性（どの人がそれを感じるか）に依存している（茂木、2003）。

(4) これに対して、他者に対しては三人称的な視点を貫き、自己に対しては一人称的視点を貫けば、問題は解決するという見解もある。それによれば、私の脳と私の意識の間の因果関係を説明することはできない。両者の間には因果ではなく、制約条件の関係があるのみである [→大森荘蔵]。他者の脳に関しては「私とその脳である事態が想像できるか」という、私の想像にとっての適合性のあるのみである（足立ほか、2001）。しかし他者の主観に関してどのようにして三人称的視点を貫くことができるのか。間主観性とも関連する問題であろう。

(5) またクオリアの私秘性 (privacy) は誤りであるという見解がある。同じものについての他人の主観的感覚は自分のそれとあまり違わないと信じてことができるからである。感覚を生み出す脳の構造は基本的に同じだからである。また言語化不能性について言うのも誤りである。他人の感覚が理解できればいいのであって、同じ感覚を経験する必要はないからである (Carruthers, 2000)、と言う。どうしてクオリアは自分だけにしか感じられないのかと

という問いはどうして自分の経験を正確に他人に伝えられないのかという問題であるという見解もある。第1にある感覚は当人の体質と過去経験に依存することが挙げられる。第2に主観的知覚は多数のエッセンシャル・ノード（特有のニューロン）で同時に生じる活動に依存しており、それが伝達のための喉頭器官に送信されるまでに変形されて記号化されてしまうことが挙げられる（コッホ、2006）。

しかしクオリアの私秘性の問題はその伝達可能性や相互理解可能性にあるのではなく、その各自性（この感覚をなぜこの肉体で感じることになったのか）にこそあるのだという点を理解していない。

2. クオリアと人称化以前の「各個」性

「私」という意識のない下等動物でのクオリアはどう考えたらよいのか。どんな下等動物でもクオリアを感じているなら、そこにも主観性とその「各個」性があるのだろうか。

人称化以前の感覚の存在は「この自分」という現象にとってどういう意味を持つのだろうか。感覚が「どの身体で感じとられるか」というのは人称化がすでにはいつている問題なのか。それともやはり感覚の存在からくるものなのか。寝てるとき、叩かれて、寝返りを打ったとして、それは「感じた」といえるのか。自分という意識のない感覚の主体は何か。下等動物のように人称性のない個体での「感覚」は「各個」性というよりも、 H_2O という物体が場所が異なれば、異なる水ではあるが、水としては同一であるというのと同じことであろうか。

言語のない動物でも感受性はあると思われる。その個別性をどう考えたらよいのか。感受性とは原初的でも心の存在と言ってよいだろう。そしてその心は必ずある有機体という物質が担う。その対応関係をどう考えたらよいのか。

どんなに原始的生物でも感覚があるなら、その「各個」性、「一人称」性が存在するということになるか。また個体発生的に新生児の原初的情動にもすでに「各個」性があるのではないか。

3. クオリア＝感覚の絶対的一人称性

（1）絶対的一人称性とは

（a）唯一「この肉体」でのみ感覚を実感する。しかもこのことは「この肉体」と言っている人すべてに当てはまる。外から観察して、各人が（それぞれが絶対的一人称的に）感覚していると三人称的には予想できる。しかし「実際にリアルに」感覚する（一人称になる）のは「ここ」では筆者の〈この肉体〉でのみである。これが「絶対的」一人称ということである。

（b）脳の中で「感覚」という主観が成立する過程、仕組みが説明できた（主観そのものは異次元のものであるから記述できないとしても、「この所」でこういう仕組みで成立するあるいは創発すると解明できた）として、それと主観の「各自」性＝絶対的一人称性の説明とどう結びつくのか。クオリアについてハードプレブルム派や現象学的接近の示すように、脳神経系からはクオリアは原理的に説明できないとしても、いずれの立場から、クオリアの「絶対的一人称性」については触れられておらず、この問題は考究すべき謎として残っている。

（c）絶対的一人称性も一人称性だけ言ってもよいのだが、「絶対的」とは実際の実感がこの1つだけ（今ここではこの筆者）であることを意味するのである。ただし各人の主観においてすべての人が「唯一ここだけ」と言える点が「唯我論」との決定的違いである。

（d）感覚するとは唯一「この肉体」（当事者）においてである [→異肉体同時感覚不可の原則]。この唯一の実感がなんで「この肉体」でだったのか。感覚がいかにして特定の唯一の「絶対的一人称性」を生じるのか。肉体を離れて感覚は独立しては生じないと確信するのだが、絶対的一人称性感覚の「この実感」とは何かという問いは、なぜ「この肉体」でだったのかという問いと不可分の関係にある。

なぜ「この肉体」でリアルに感覚することになった（絶対的一人称化した）のかは各人が同様に問えるのだが、感覚自体は三人称的視点とはなりえないので、各人が同等ではない。必ず各自にとって「唯一」の感覚であり、さらにここではこの筆者しかり

アルに体験できないので「絶対的一人称性感覚」なのである。

(e) 唯一、この目(耳・皮膚など)からすべて(他人を含む)を見たり、感じたりするのである。ということは自分の知らないところでの、他者の感覚は「ない」に等しい。ということは「この個体・私」が死んだら、すべてが消滅するも同然ということでもある。ということは「この個体・主体・私」がいるから、(私にとっては)すべてがあるも同然である。これも「絶対的一人称性」である。なお「私にとっては」という限定が独我論との決定的違いである。

例えば、コンサート会場に居るとする。そもそもその場に(間接的にでも)〈私〉が居なければ、さらにそのコンサートについて知っていなければ、そのコンサートの世界は〈私〉にとっては、存在しないに等しい。そこにすでに〈私〉が居るなら、その「絶対的一人称化」が起きている。これはどういうことか。

世界が世界についての私の意識以前に存在しうるなどということは論外である。私のいない世界に私が思いを致すということそのものによって私にとっての世界になるということである(メルロ＝ポンティ、1989)。

(2) リアルに実感したものが〈私〉となる

どの肉体であれ、「リアルな実感」を有したものが〈私〉となる。とにかく「偶然に・たまたま」であれ感覚が絶対的一人称化した肉体が〈この私〉となったのであろう。つまり今ここでリアルに感じている肉体が「自分」というものの源になったのである。

傷ついたら、「この」肉体では「痛い!」となるが、あの肉体が傷ついても「この」肉体では痛くない。他人なら「あいつ、痛いだろうな」で終わってしまう。傷ついて「リアルに痛い!」と感じる肉体が〈私〉となる。(何回も述べるように、どの肉体もみな「リアルに感覚している」というのとは「次元」が異なる。「真に」実感しているのである。どうして「この肉体」で(あの肉体ではなく)感じる

ことになったのか。

4. 感覚の「よりによってこの肉体で」という絶対的一人称性の謎

(1) 基本の謎・問い

なぜよりによって〈この肉体＝ここでは筆者〉で(あの肉体ではなく)、感覚＝クオリアのリアルな実感(絶対的一人称化)が生じたのか。何がそれを決めるのか。

すなわち繰り返し強調することになるが、感覚・クオリアが生じるのは共通の脳神経系の仕組みのはずなのに、「真にリアルな感覚」は1つの肉体(ここではこの筆者)でのみである。すべての肉体で同じことが言えるのだが、〈私〉にとっては、それはあくまでも三人称的な表現としてである。

心的世界としては図3のように、「唯我性」とも言えそうな構図となるが、その中にある他者を含めた諸存在の实在性を認める点で独我論とは異なると言えよう。

(2) 永井(1990)は「〈私〉とは唯一者であり、『最も重要な意味において隣人をもたない』ものであった。『他の〈私〉』とは、だから、矛盾表現であり、他の〈私〉の存在とは、一個のパラドックスでしかありえないはずなのである。唯一者の複数性。隣人をもたないものの隣人。…他者が存在するとは、しかし、まさにそのような不可能性が存在するということ、すなわち〈私〉の世界の中に登場してることが原理的にありえないものが存在するという、にほかならないのではなかったか」と述べている(図2)。〈私〉は唯一「ここ」にしか存在しないのである。他人が同じ意味で「私」であることはありえないのである。なのに同じように「私」であることを感じている他者が存在すると想定しうるのである。永井に対して筆者であるこの〈私〉のように。

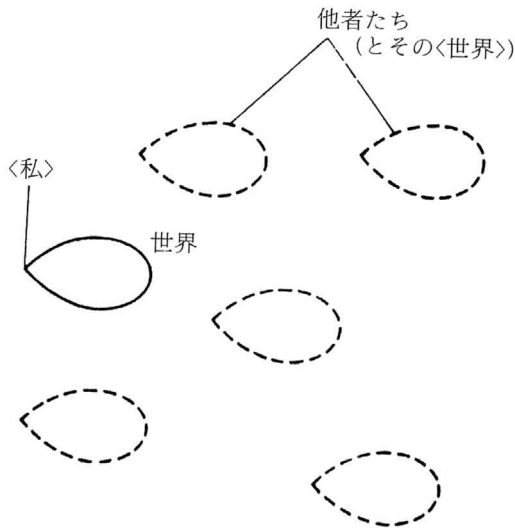


図2. <私>の世界の「唯我性」(永井, 1990)

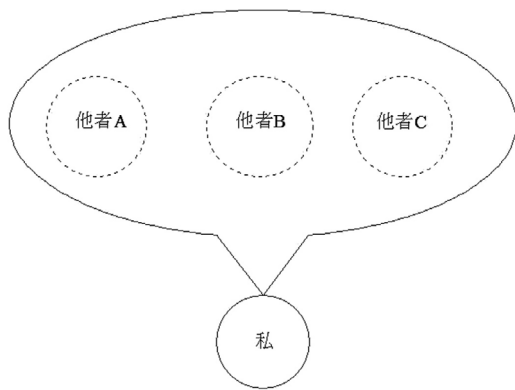


図3. <私>の絶対的一人称性

(3) リアルな感覚主体の特定化

(a) 三人称的にはすべての個体が、動物(ゴキブリにも感覚がある)を含めて、「一人称的」に感覚すると想定はできるが、実際に「真に」リアルに感覚する、実感する(「ボン!」という音を聞く)のは常に「この自分」(他の動物ならさしずめ「ここ!」か)である。つまり唯一「この肉体」からしか実感できないし、世界を感じられないという感覚が絶対的一人称性であった。

(b) 感覚=主観が成立するとはその個別性の成立でもある。例えば、ある爆発があったとする。そこ

にいくつかの個体が居る。それぞれが「音を聞く」。ある個体は他の個体の感覚を知らない。いわば「自分」という個体(特定の1つの「この個体」)の聴覚しか感覚しない(ゴキブリには「自分」という意識はないだろうから、感覚(経験)そのものの個別性=「各個」性と言った方がいいかもしれないが)。この肉体で刺激を感じるのに、他のあの個体での感覚は感じない。ではどうしてその個体で(他の個体でなく)「リアルに」音を聞くことになったのか(図4)。

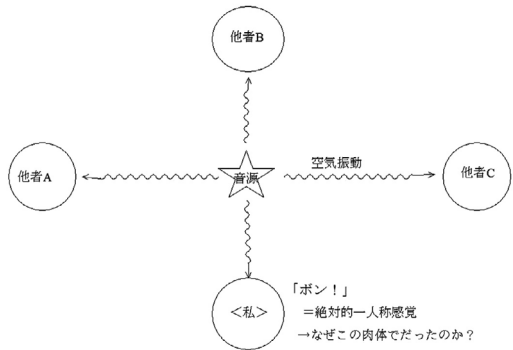


図4. <私>の感覚の絶対的一人称性

(c) それぞれが唯一その肉体でのみ絶対的一人称化する。しかしそれぞれの肉体が一人称の主観として並列しているのではなく、実際にリアルに「絶対的一人称」の感覚を持つのは唯一の特定の肉体のみである。感覚「ボン!」や「ピカ!」(暗闇で突然光ったなど)は<この主体>(図4の<私>)の感覚であって、他の個体ではない。他の個体もみな「ピカ!」と一人称で感覚しているだろうが、あくまで<私>の三人称的な想像であって、「実際」に「リアル」に感覚するのは唯一その問いを發する人=<私>=筆者の<この肉体>でのみである。どのようにしてそうなるのか。実は他の個体もそれぞれにおいて同様に問うことができるのだが。他人がそこにおいて感じているであろう一人称感覚と<この筆者の肉体>での絶対的一人称感覚の違いは何か。図4で他人であるBの「リアルな実感」を考えてみる。<この肉体=私>にとっては、Bの実感はある

くまで予想でしかないが、同様に、Bにとっては<私>の実感は予想でしかない。「現実」つまり<私>にとって存在するのはリアルな実感なのだが、それはBらの実感と何が違うのか。<私>として絶対的一人称化してしまった点であろうか。

(d) 各人が「絶対的一人称性」の同じ問いを一齐に出したとしてみる。どういう論議になるか。他者の感覚の直接体験は相互に不可であることが分かるのではないか。さらに感覚の「この肉体で」というみんなが持つ「唯一」特定性が実感的に分かるのではないか。

例えば、K「私はここで感覚を実感しているわよ」。私「いや、そう言われても、それは私には分からない、実感できない。実感するのは私のこの肉体でだけだ」。K「私にだって、あなたが言うのと同じことが言えるわよ」。これはよく言われる当たり前のことだが、どうして「真にリアルに」実感するのが、<この肉体>でだったのかは謎ではないか。

5. 異個体同時感覚不可の原則

同時に複数の肉体で一人称的に感じることはできない。なぜリアルな一人称的感覚は同時には1つの肉体でしか感じられないのか。

茂木によれば、「私」の同一性はニューロンの発火パターンの同一性である。ある人の睡眠の前後の同一性とある人の死後に同じ脳のニューロンの発火パターンを偶然持つ別の人物がある人と同一と言えるのは同じことである。それなら「私」の完全な(肉体と脳のニューロンの発火パターンまで同じ)コピー人間は「私」なのか。直観的に私とは違う赤の他人だと思われる。決定的に違うのは死後の同じ「私」は同時には存在しないが、コピー人間は同時に存在するという点である(茂木, 1997)。果たしてコピーではない、同一の発火パターンなら同じ「私」となると言えるのかは不明である。これは「800」年後に「自分」と感じている人(すなわち同時期に今の<私>が存在しない場合)と<私>の隣人で(同時期に)「自分」と感じているであろうすべての人との違いと通じるものがあるかもしれない。

6. 絶対的一人称性を時系列で考えた場合

(1) 永井の図2を時系列的に並べてみると、より分かりやすいかもしれない(図5)。ただしここでは<私>という現象より、その源である感覚=クオリアを問題にしているが。なお図の矢印線は現時点までの生存期間を示す。図の中の現時点から見ると、永井の図とはほぼ同じとなる。

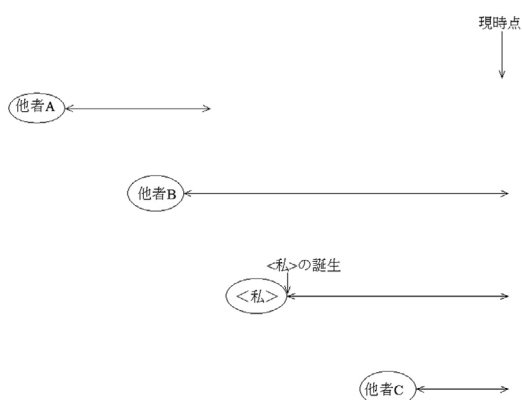


図5. 時系列でみた絶対的一人称性

- (a) まずそれぞれの肉体が時間的ズレを持って、誕生する。
- (b) 歴史上のある時点では一定の複数の肉体が同時存在する。
- (c) 各肉体はそれぞれ「一人称」的感覚を持つと想定できる。
- (d) <この私>=筆者が生まれる前に生まれた人たち(しかも今は<私>と同時に生きている)が当時何かを感じているが、それはここで言う「リアル」ではない。その人にとっては「リアルな」感覚だろうが、<この私>が想定するだけである。なぜなら、「リアル」な感覚は<この私>においてだけだから。もし<この私>以前に生まれた肉体Bで「リアル」な感覚を感じていたなら、その肉体Bが<私>になっていただろう。
- (2) 他の肉体を「パス」したことについて
- (a) <この私=この筆者>の誕生前に生まれた人たち(しかも今は<私>と同時に生きている)の感

覚ではなく、よりによって<この肉体>での感覚になったのはどうしてか。つまり私の直前に生まれた人の感覚に絶対的一人称化せず（いわばパスして）、<この私の肉体>まで「待っていた」（他の肉体で実感することをパスした）ということはどういうことか（<私>の少し前に誕生した人はその人の前に誕生した人に対して、同様に問うことができるが）。ただし<この私>と言うのはややおかしいかもしれない。絶対的一人称化した肉体が「私」となるのだから、それまでは「私」はおそらく存在しないので、「この肉体」とだけ言うべきであろう。なぜ絶対的一人称感覚が別の肉体を「パス」したのか。別の「真の実感」（後の<私>の実感）を予想しているからか。「パス」せず、「スイッチ」が入ってしまったのが、「結果論」的に<この私>の感覚となったのである。絶対的一人称性感覚が「一人歩き」するのもおかしい感じがするのだが、そうすると他を「パス」して、ここで「スイッチ」が入った、この絶対的一人称性感覚とは一体何か。

(b) 他の肉体を「パス」したのは、絶対的一人称性感覚だとして、他の肉体での「実感」（当人には絶対的一人称性感覚だが、<私>には三人称的な予想だが）を<私>の実感として感じることを「パス」したと言ってよいのか。この言い方だと<私>が実感より先にあることにならないか。

(c) <私>の絶対的一人称性感覚が存在しないときは、たとえ、<私>の誕生前に、他の肉体が、それなりに世界を「実感」していても、（将来の私？からみたら）それを「パス」しているということは、「真にリアルに」世界を実感していることがない状態と言えるのか。いわば完全な「無」世界の状態か（三人称的には実感している人たちがいるのに!?)。あるいは<私>（の感覚）はその人たち（の感覚）ではないという「否定性」だけは言える状態か。いずれにしてもこれらはすでに<私>が存在して、結果論的に振り返っていることでしかないのか。

(d) 他の肉体が「私」となった人は、その肉体で実感したのだが、その実感と、その後の肉体が<私>＝ここでは筆者>となった<この私>の実感との根本的違いは何か。他の肉体の実感となることを「パ

ス」して、「ここ」で「我がこととして真にリアルに」感覚＝実感するとはどういうことか。

(e) <私>より後に生まれてその人にとっては絶対的一人称性感覚を感じている人（三人称的にはみなそうなのだが）は、<この私>を「パス」したわけである。その場合は、その人にとっては<この私>は他人（ある人）にすぎない。これはどの世代でもどの人にも言えることである。しかしあるいは従って、「今ここ」では<この私（筆者）>しか問題にならない。言い換えれば、その後の<私>の実感から「遡って」、先行する他の肉体の実感となることを「パス」したと言えるのだ。つまり当時に「パス」したとき、将来の<私>の実感を予想・前提していることになるのか。もしそうなら、将来の「予知」「宿命」みたいなことがあるのか。それとも「パス」問題をあえて出さなくても、先行する肉体ではない<この肉体>で絶対的一人称性感覚を生じたのはどうしてか、という問いで十分なのか。この辺の問題がいまだにスッキリしない。みんな各人がそれぞれに感覚・実感しているのに、真に実感しているのは<この肉体>でのみだということはどういうことか。

例えば、<私>からは他人である A という肉体において「絶対的一人称化スイッチ」が入って、「我がこと」として実感が生じているはずだが、それを今ここでは<私＝この筆者>のこととして（我がこととして）実感していない。A をいわば「パス」して、<この筆者>の肉体でだけ絶対的一人称性感覚を持った。A の実感を「我がこと」としなかったのはどうしてか。大きな謎である。

(3) 「パス」は結果論でしかないのか

他の個体での一人称性は想像するだけであって、実感はできない。この個体での一人称性しか実感はできない（＝絶対的一人称性）。そのような実感がどうしてこの肉体（あの肉体ではなく）でだったのか。すでに存在し絶対的一人称化している<私>から振り返って問ういわば結果論でしかないのか。そうなら「偶然」説になるのか。つまり「たまたま」実感が生じた肉体が<この私>となり、そこから「単に」「結果論的に」振り返っているにすぎないのか。

結果だとしても、どうして<この実感>が<この肉体>で生じたのか。

(4) 肉体と感覚の相対的区別

(a) 「この肉体」で「リアルな絶対的一人称性感覚」となることと、逆に「リアルな絶対的一人称性感覚」が「この肉体」でなされることとは微妙に意味が違つかも。いや、「リアルな絶対的一人称性感覚」を生じた肉体が「この肉体」であろう。そうではあろうが、みんなが同じ感覚構造を持っている肉体側だけからは「リアルな絶対的一人称性感覚」は説明しきれないのではないか。つまり「この肉体」の出現は「絶対的一人称感覚」を前提しているのではないか。指紋みたいには個別の肉体の方からでは、説明できないのではないか。決まらないのではないか。感じるという絶対的一人称性の方から考えないと解明できないのではないか。肉体と感覚=心は一体だと言っただけでは解決にならないのではないか。

(b) ある肉体での感覚が「このリアルな実感」として感じるようになったのはどのようにしてか。一人称の実感を肉体的神経的基盤から独立させるわけではないのだが、一人称の実感に重点を置くことのような問いになるだろう。

以上の問い方は微妙にニュアンスが異なるように思われる。絶対的一人称感覚を基本に置く場合も必ずしも汎心論・二元論ではなく、脳神経系を基盤に生じると考えてもよい。「絶対的一人称性」を「独立」させるような発想でいいのか。ここで「独立」と表現するのは、「真にリアルに実感すること」を意味する。従って、肉体的基盤から「独立」しているという意味ではない。肉体そのものよりも肉体から生まれる絶対的一人称感覚を基本に考えるということである。それが「結果的に(?)ある肉体に生じるのはどのようにしてか」という問いである。

(5) <私>の誕生以前に生まれた人の中に今の<私>と同じように当時に<私>=「絶対的一人称性」だった人がいたと言えるのか。

少なくとも<私>の存在以前から存在して、しかもその後、<私>と同時期を生きている人々が<私>=

「絶対的一人称性」ではないことがいくらかでもあると言えよう。ということは少なくともそれらのケースでは、今の<私>が存在する以前に生まれたからと言っても、必ずしも<この私>(絶対的一人称性)にならないことが当然ながら、あるわけである。それらの人たちの死後、わずかでも時間的なズレがあつて、<私>が生まれた場合には、それらの過去の人々の中に<この私>がある可能性は存在するの。同様に<私>の死後に誕生した人の中に今の<私>と同じ絶対的一人称的感覚を持つ人がありうるのか。両者に何のつながりもないとすれば、<私>がいま生きていて、そこで他人が感覚しているであろう実感と何が異なるのか。<この私>の誕生以前と死後に<私>が存在するとして、それらは同じ<私>と言えるのか。つまり互いに単なる他人ではないのか。それとも「リアルな」実感であるなら、「同じ」自分と言えるのだろうか。

(6) リアルな感覚の同時存在ができないということは、他の人の「私」にとっても同様のことが言えるはずだ。しかし<私>の死後は唯一絶対的一人称性は存在しうるのか。偶然説なら、ありえよう。それとも過去、未来どこでも「同じ?!」唯一絶対的一人称性は二度と存在しないのか。そこでは「絶対的一人称性」には、どういう「固有性」があるのだろうか。

7. 同時性と時系列性を統合すると

(1) 図6で左側のタテの矢印は各個体の誕生順である。菱形はその中にいるそれぞれの「私」(実線の小さい○)が認識する世界を示す。ここでは<私>=筆者>がいる世界が唯一の実感世界である。それぞれの他人の世界は<私>が想定している世界である。「想定している」というのはその世界が実在しないとか仮想世界という意味ではなく、各人から見る世界は<私>には実感できないという意味である。

(2) 同時期に生きているということは各自の世界が人数分重なっている感じである。点線の菱形の世界はその「私」が死去していることを示す。

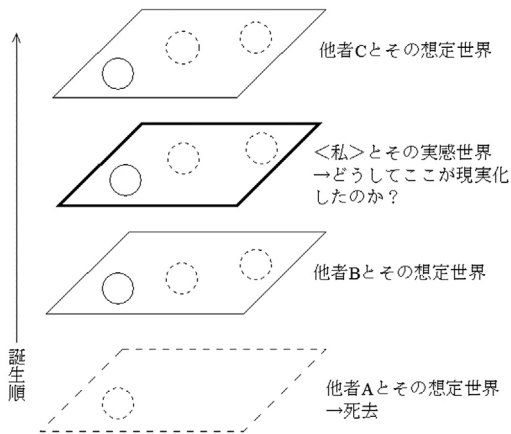


図6. 絶対的一人称性と現実世界・想定世界

(3) ある肉体で感覚が絶対的一人称化すると、そこが現実化した実感世界となる。そこから見ると、すべての他人がそれぞれ1つの想定された認識世界となっている。

(4) 感覚とその一人称化の仕組みが各人で同じ＝共通であるなら、どの世界が現実化＝実感化するのにかつて、同じ問題が生じる。

人の数だけ実感化・活性化された認識世界があるはずだが、「偶然」にある認識世界が実感化・活性化したのだろうか。

しかし基本は永井の図の個体のどれが「実感化・活性化・現実化」するのかと同じことではないだろうか。

IV. 絶対的一人称的感覚をもたらす仕組み

1. 感覚＝実感と絶対的一人称性の不可分性

(1) 感覚＝クオリアが成立するとは主観＝感覚主体というものがあることでもある。

クオリアの「謎」の解明とは、単に感覚という主観がいかに成立するのかわけでなく、その主観の「絶対的一人称性」の「謎」の解明なのである。意識には2つの問題がある。第1はクオリアが脳の中でどのように生み出されるのかであり、第2はそのクオリアの主体の「自己意識」を脳はどのように生み出すのかである。この2つは緊密に関連して、

後者は前者の中に組み込まれている(ダマシオ, 2003)。「感じる」「感覚する」と「ここ」性＝「よりによってこの肉体」性＝絶対的一人称性は不可分のことである。そもそも感覚自体が特定の実感であり、絶対的一人称であるだろう。つまり各個体にも固有だということである。真にリアルに感覚・実感する瞬間に「よりによって、この肉体」という絶対的一人称性(「この自分」の実感＝感覚)が生まれる。つまり「リアルな感覚」は必ずその感覚主体を不可分のものとするのである。では感覚がその肉体を特定化する仕組みは何か。主観が生じる仕組みの中にこの「各個」性を解く鍵があるのではないか。

(2) 指紋や外見などもみんながそれぞれに唯一であり、同じことではないか、という意見もあろう。しかし肉体側の問題ではない。肉体とは全く異質の「意味づけとしての心」の源泉である感覚を問題にしているのである。感覚・クオリアは肉体とは相対的に区別されるのである。

2. クオリア発生の仕組みの中に絶対的一人称性をもたらす仕組みが含まれているのか

(1) ある肉体が誕生し、他と同じ共通の脳神経系の構造によって、ある感覚＝クオリアを持つ。それはその人にとっては「唯一のリアルな」感覚である。ただし、そのことはすべての個体について言える。

(2) ある肉体での感覚＝クオリアが「唯一のリアルな実感」となったとき、他でもない「この肉体」での感覚(「私」の基盤)となる。どの肉体の感覚＝一人称を「選び」、それを絶対化するのはいかなる仕組みによるのか。

(3) 「なんで<この肉体>で感覚することになったのか」という問い方は「絶対的一人称性」を「魂」のように「独立」させてしまうわけではないのだが、そうではないとするなら、どうしても肉体(脳神経系)側に基盤があるのだと、つまりクオリア発生の仕組みの中に含まれていると考えざるをえないので

はないか。

(4) やはり本当に実感するというのは、単にみんなが三人称的に実感すると言うのとは、違う特別な一つの仕組みがあると思えてならない。つまり各人がそれぞれに「一人称」的感觉をしているのだが、実際は筆者のこの特定の肉体でのみ実感している(絶対的一人称性)。ここに説明すべきギャップがある。なんでこの肉体でよりによって、実感することになったのか(各人がそう問えるのだが、ここではこの筆者しかいない)、感觉そのものとは違うもう一つの謎のように思えてならない。

3. クオリアをもたらず感觉-神経系は各人に共通の同じ仕組みのはずなのに、どうして個別的な感觉の絶対的一人称化をもたらずのか。

(1) 仕組みの共通性と絶対的一人称性感觉の固有性ととのギャップ

感觉-神経系の興奮による感觉・クオリアが生じる仕組みがすべての個体で基本的に同じ仕組みであるなら、本当はこれを目ざしたいのだが、そうでないと普遍性がなくなるように思われるので、しかし共通だとしたら、どうして、感觉は「ここだけの唯一の特権的なリアルな」感觉つまり絶対的一人称性になりうるのか。どうして「ある=この」特定の肉体(ここではこの筆者)にリアルな実感は「絶対化」するのか。

唯一「この肉体」でのみ、絶対的一人称性感觉・実感をするのだが、しかもすべての肉体(他人)についても同様のことが言える。しかし互いに排他的である。すなわち同時に絶対的一人称性が複数存在することはできない。「ボン!」という感觉は「ここ」でだけ唯一である。しかもそのことが個体の数だけあるということである。そこで実際の絶対的一人称である<この肉体>=この筆者での感觉が生じた仕組みは何か。その感觉を「我がこと」として感じる実際のリアルな感觉は唯一特定の肉体でなのだ(<私>の同時存在の不可能性)。感觉が働き始めた、リアルに主観(感觉)を感じた「途端」に特定性=唯「我」性=「ここ」性=絶対的一人称性が生

じるのはどういうことか。動物も含めて各個体が「感觉・実感」しているということと実際にリアルに「感觉・実感」しているのはくこの私=筆者>しかいないということ(絶対的一人称性)のギャップをどう考えたらいいのか。両者の違いは何か。

(2) <この私>にだけ特有の仕組みとは考えにくい <この私>が絶対的一人称性となった仕組みは各人がそうであったと想定される仕組みと同じなのか。個体A, B, C, ……、それぞれの想定される「絶対的一人称性」を説明できる感觉の理論でなければならないはずだ。それとも<この私>(=この筆者)だけに通用する仕組みなのだろうか。確かにそうとも言えるが!?!しかしそれこそ「独我論」になってしまわないか。<この肉体>=この筆者にしか当てはまらないこととはとても思えない。なぜなら、もしそうなら、他の「絶対的一人称性」(実感はできないとはいえ、存在を疑うことはできないであろう)の存在を説明できなくなるからだ(独我論不可)。その内の一人である<この私>について問題にしているのだ。

(3) 必然と偶然

感觉することの「どこで」決まるのか。それがどの肉体かはどうやって決まるのか。それがもし必然なら、<この肉体>=この筆者だけ必然なのか、すべての肉体のリアルであろう感觉もその肉体においてということは必然なのか。どういう必然なのか。必然でないなら、偶然なのか。とするなら、どういう点が偶然なのか。

V. クオリア発生仕組みに何かが付加するのか?

1. 「何も不思議ではない」説

(1) 肉体があれば、そこには必ず対応した(その仕組みはまだ分かっていないとは言え)感觉(一人称性)が生まれるということは一応確認できるだろう。

(2) それぞれの肉体の感觉には、それに対応する絶対的一人称性(唯一その肉体でのみ感觉・実感す

るという)が備わるということも「客観的」・三人称的には(つまり他人の感覚は実感できないので推測するしかない)言えるだろう。

(3) ここでの問い自体が成り立つかどうかの問題

(a) みんなそれぞれ一人称的に感覚しており、それぞれが個別の特有の感覚を持っていることは当たり前前で何も謎ではない、という意見もある。だから<この自分>もその1つであるにすぎない、というわけである。「この肉体=自分」の感覚=クオリアの絶対的一人称性はただそれを表しているにすぎない。「たまたま」その一人が「この自分の肉体」だけだけであるとも言えるかもしれない。だからみんながそれぞれそう感じているだけのことである。

(b) 留意してきたように、確かに「謎」だという問題の立て方自体がおかしいのかもしれない。二元論や還元論に陥っていると見なされるかもしれない。どういう視点・意識がこういう問題を立てるのかということも重要な問題であろう。

(4) しかし、みんなが実感している(絶対的一人称の感覚を持っている)と言うのは、実は実情に合わず、三人称的記述か超越的視点で言えることである。「私」がみんなの感覚を一人称として実感するわけではない。実際は「私にとっては」<この私>の絶対的一人称の実感しか存在しない。同時に2個体以上で実感=絶対的一人称感覚をすることはできないということ(異個体同時感覚不可の原則)、すなわち「この肉体」1カ所でのみだということ。つまりどうして「この肉体」で唯一実感することになったのか、同じことだが、微妙にニュアンスが違うが、その1カ所がどうして「この肉体」になったのか、感覚の絶対的一人称性はすべての人がそれぞれ持っているとはいえ、<この私>の固有の絶対的一人称性が「どうしてよりによってこの肉体でだったのか」は問うに値する謎ではないか。

2. 偶然説

(1) どの肉体で実感すること(絶対的一人称化)になるかは偶然か

各人の感覚を発生する仕組みが同じで、「神」など「外部」から「操作」されることがないとしたら、共通の仕組みの中に「絶対的一人称性」を生み出す仕組みがあるはずだ。どういう仕組みなのか。共通だとしたら、何が個性をもたらすのか。そこに何かの付加あるいは「スイッチ」が入るのだろうか。それは偶然なのか。しかしどういう点が偶然なのか。

(2) 偶然とは必然の否定である。必然とは本来の同一者の同一性の諸契機がさまざまな形で(潜在的なものから)現勢化することである。従って、偶然とは本来は同一者に含まれない複数の独立した項・契機がランダム(確率的)に出会うことであろう。

(3) クオリア発生の偶然説だとすると何と何が偶然に出会うのか。絶対的一人称性がどの肉体で生じるかは偶然であるということか。単純に考えると「ある肉体」と「真にリアルな実感(絶対一人称感覚)の出会いであろう。では後者の項は一体何か。その絶対的一人称性はどこから来るのか。肉体と独立に存在しうるのか。独立ではないなら、偶然とは言えないのではないか。

(4) 各個体に感覚が生まれる際に、「ある」特定の肉体(ここでは<この筆者の肉体>)にだけ、「絶対的一人称化スイッチ」が「なんらかの事情で」「偶然」に「入った」と考えてみることもできよう。しかし偶然だとしても、どういう「スイッチ」か。異肉体同時感覚不可の原則があるなら、完全な偶然とは言えないだろう。完全な偶然なら複数の「この感覚」が存在しうるはずだから。感覚・クオリアは絶対的一人称であり、同時に複数の個体で実感することはできない。同時期には1回きりという条件付きの「偶然」なのか。その場合は何がその条件を付けるのか。

(5) 「偶然」に、<この肉体>(受精卵のレベル

から)で絶対的一人称化スイッチが入ってしまったとするなら、しかも他の肉体でもそれぞれ同様に「なぜこの肉体でスイッチが入ったのか」と問えるとすると、他者での偶然と<私>の偶然の違いは何か。同様の「偶然」として並列できないのではないか。つまりすべての他者の「スイッチ」と絶対的一人称感覚の実感(1カ所(<この筆者の肉体>)のみであることとのギャップである。

(6)もし他の肉体でこのスイッチが入っていたら、その肉体が<この私>になっていたはずである。この点は常に「結果論」なので、結局、<この筆者の肉体>で「絶対一人称化スイッチ」が入ったのはどうしてか、どういう固有のスイッチなのかと問うことはできよう。ではそれぞれの他者に一人称的感覚をもたらしたであろう「スイッチ」と何が違うのか。

3. 絶対的一人称化スイッチの想定

(1)すべての個体で一人称的感覚が生じる(感覚を生じるであろう神経が興奮しているのだから?)のだが、実際に感覚(クオリア)をリアルに実感するのはその「当事者」の個体だけである(ここではこの筆者である)。それを「決める」仕組みは全く不明なので、一応「絶対的一人称化スイッチ」と呼んでおこう。他でもない<この肉体=筆者>で実感することになったという点が「絶対的」という意味である。

各人が同じように「一人称的」に感じており、同じ感覚構造を持っているとするなら、事実そうであるはずだが、絶対的一人称となるためには、<この私=筆者の肉体>に固有の「何か」の作用が加わったとしか言いようがないのではないか。他の肉体ではなく、まさに<筆者のこの肉体>でのみリアルに実感させる仕組みである。

(2)しかし<この筆者>にのみ特有の「スイッチ」とすると、もしそこから「実感」を<この私>に限定してしまうと考えるなら、一種の「独我論」になってしまう(他者の感覚を認める点で独我論ではないが、「リアルな実感世界」は<この肉体=筆

者>でのみ唯一特定と考えるので唯我性があると言えるかもしれないが)。各人においてもそれぞれに同様の「スイッチ」が入ると思われるが、<私=この筆者>の「スイッチ」との違いは何か。ただし「各人にも同様にスイッチが入る」という言い方でよいのか。独我論でもなく、しかも<この筆者>の肉体にのみ固有の実感世界をもたらす仕組みを「各人と同様のスイッチ」と言ったのでは、説明する方向とはならないのではないか。むしろ「スイッチ」の違いこそが重要なのではないか。<この肉体=筆者>に固有の感覚の「唯我性」を感じさせる「スイッチ」とでも言った方がよいのかもしれない。未だに分らない点である。

(3)いつ生まれたかを含むどの肉体で唯一の<私>の感覚・実感の「スイッチ」(<私>だけの)が入るのかはどのようにして決まるのか。1歳頃の自分という肉体を考えてみる。例えば、なにか「怖い」という実感を、どうしてあの肉体ではなく、<この肉体>で感じる=実感=実体験することになったのか。明確な自己が未成立だとしても、その感覚を乳幼児が「我がこと」(自己意識以前の体験としての「我」)として感じるのはどのようにしてか。さらに受精時にまで何らかの感受性を遡ることができるかもしれない。

(4)「唯一実感スイッチ」=「絶対的一人称化スイッチ」がどこか肉体とは独立にあったら、多くの肉体の生存がほぼ重なる同時期にある肉体にすでに入っていたら、その他には入らないわけだが、どうしてそのことが「分かる」のか(内的スイッチだとしても、一旦入ったら、同時期には他の個体では入らないのはなぜか)。(「神」の采配のようなことを考えないなら)そういう「外」的スイッチではなく、あとは当の主体、肉体(神経系)の問題のはずだ。あくまで肉体が基盤のはずだ。

(5)ある肉体でのクオリア発生がすなわちスイッチオンでもある。その「実感」の「スイッチ」は、同時に存在する(=生存期間が一部でも重なる)

諸個体（ゴキブリなどの下等動物も含めて？）の中
では、1つだけに「入る」（受精の瞬間か？）。しか
もその「1つだけ」というのはすべての個体におい
て言えるのだが、真に実感できるのはこの筆者
の〈私〉においてのみなのである。その「スイッチ」
以外ではほぼ同じ仕組み（感覚発生）のはずであ
ろうが、ある特定の肉体（ここではこの筆者）に「ス
イッチ」が入る仕組みは何か。

すでに述べたように、感覚自体が独立して存在す
るわけではないと思われるので、感覚が生じるため
には、脳神経系という肉体が感覚主体となる必要が
あるであろう。ある肉体（脳神経系）が感覚主体
になるとはどういうことか。「絶対的一人称化スイ
ッチ」とはある肉体での神経興奮を一人称として実感
（「ボン！」という音など）させるものである（ク
オリア発生仕組みが不明なので「スイッチ」と表
現しているにすぎない）。しかも各肉体でそうさせ
るといふ三人称的な事象としてではなく、まさに唯
一〈この肉体＝この私＝この筆者〉でのみ（＝絶対
的）の実感を生じさせるものである。どの肉体も「潜
在的」にリアルな感覚主体となるとしても実際に「こ
の肉体」として「顕在化」（スイッチオン）するの
はどのようにしてか。

（6）すべての個体について、ある個体だけ（この
私）の絶対一人称性をもたらす「スイッチ」がある
のか。絶対的一人称の感覚は唯一「この肉体」で
だけだと、すべての個体に思わせるものは何か。「こ
の実感とは何か」とすべての個体が問えるのに、あ
る特定の肉体でしか、ここでは〈この筆者〉の肉体
でしか実感できないとはどういうことか。

（7）Aという肉体を「この肉体」として、そこ
での感覚を実感させるように、「何か」によって「リ
アルな実感」を「割り振られた」と考えられるなら、
スッキリするのかもしれないが。例えば、特定の唯
一の肉体にだけ入る絶対一人称化スイッチとは、ス
イッチ肉体 No. ○○○みたいな宿命的にあらかじめ決ま
っているのか。

（8）感覚＝クオリアを「我がこと」として実感す
る際の「我」とはここでは筆者だけを指す。あの肉
体の「我がこと」の感覚ではなく、〈この肉体〉で
の「我がこと」の感覚となったのはどのようにして
か。〈この肉体〉の少し前に生まれたあの肉体では
なく、〈この肉体〉までリアルな我がことの実感を
持つのを「待った」のはどうしてか。「今ここ」で
まさに感じているこの「唯一」の感覚はどうして生
まれたのか。他ではなく、「この肉体」での神経興
奮を今まさにリアルに「我がこと」として実感する
のはどうしてか。

前の肉体では実感を「パス」して、「この肉体」
ではパスせず、いわば〈私〉に固有の「スイッチが
入って」実感化したのはどうしてか。しかもその後
は「この肉体」が少なくとも死ぬまでは他の肉体で
は「スイッチ」が入らないのである（同時感覚不可
の原則）。謎はいまだに解明されないままである。

おわりに

筆者がクオリアに関心を持つ最大の理由はそれが
「自分＝私」という現象、とりわけその「各自」性
の謎（Harder Problem）を解く鍵になるのではない
かと思っていることにある。各感覚様相に分化す
る前の原初的な感受性＝情動に人間における「自己
意識」の出発点があると思われるが、自己意識の「各
自」性の謎は、従って原初的な感受性の「各個」性
の謎を出発点にしているように思われる。各感受性
＝各主観が各個体・各肉体に固有であるとはどうい
うことかがもっと深く検討されるべきである。クオ
リアの成立機序の解明がその糸口となるように思わ
れるのである。

本論での基本の謎・問いは「なぜよりによって
この肉体＝ここでは筆者〉で（あの肉体でではなく）、
感覚＝クオリアのリアルな実感（絶対的一人称化）
が生じたのか」ということである。そして感覚＝神
経系の興奮による感覚・クオリアが生じる仕組みが
すべての個体で基本的に同じであるなら、どうして、
「ここだけの唯一の特権的なリアルな」感覚つまり
絶対的一人称性になりうるのか。そこにある肉体で

の神経興奮を一人称として実感（「ボン！」という音など）させる「絶対的一人称化スイッチ」とでも言うものが働くのだろうか。この謎がポイントであろう。

すでにこの世界に生きてしまっている「この私」の「世界内存在」性とすでにクオリアが「各個」性として生じてしまっている「生きられる身体」性という哲学的現象学的アプローチと脳研究がどのように結びつくのかも重要な検討課題であろう。脳の機能として主観・心を見るとき還元論的発想が根本的に見逃しているものがあるかもしれない。心身論の広い視野の中でクオリアの問題に接近すべきであろう。

文献

- 足立自朗・渡辺恒夫・月本洋・石川幹人（編），2001，心とは何か，北大路書房。
- Baars, B.J., 1997, Understanding Subjectivity: Global Workspace Theory and the Resurrection of the Observing Self. In Shear, J.(ed.). Explaining Consciousness: The 'Hard Problem', MIT Pr.
- Bennett, M., Dennett, D., Hacker, P., & Searle J., 2007, Neuroscience and Philosophy, Columbia U.Pr.
- Carruthers, P., 2000, Phenomenal consciousness: A naturalistic theory, Cambridge U.P.
- Clark, T.W., 1997, Function and Phenomenology: Closing the Explanatory Gap, In Shear, J.(ed.), Explaining Consciousness: The 'Hard Problem', MIT Pr.
- ダマシオ (Damasio), A.R., 田中三彦(訳), 2003, 無意識の脳自己意識の脳, 講談社. (1999, The feeling of what happens, Harcourt Brace & Company.)
- デネット (Dennett), D.C., 山口泰司(訳), 1998, 解明される意識, 青土社. (1991, Consciousness explained, Little Brown & Co.)
- ギブソン (Gibson), J. J., 境敦史・河野哲也(訳), 2004, ギブソン心理学論集直接知覚論の根拠, 勁草書房. (1982, Reasons for realism, LEA)
- 郡司ベギオ-幸夫, 2003, 私の意識とは何か生命理論2, 哲学書房.
- 廣松渉, 1989, 身心問題, 青土社.
- ハンフリー (Humphrey), N., 柴田裕之(訳), 2006, 赤を見る, 紀伊國屋書店. (2006, Seeing Red, Harvard U.Pr.)
- 唐木健一, 2007, 生命論, 批評社.
- 河村次郎, 2004, 意識の神経哲学, 萌書房.
- 河村次郎, 2007, 自我と生命, 萌書房.
- コッホ (Koch), C., 土谷尚嗣・金井良太(訳), 2006, 意識の探求(下), 岩波書店. (2004, The Quest for Consciousness: A Neurobiological Approach, Robert & Company Pub.)
- Maslin, K.T., 2001, Introduction to the Philosophy of Mind, Polity Pr.
- メルロ=ポンティ (Merleau-Ponty), M., 滝浦静雄・木田元(訳), 1989, 見えるものと見えないもの, みすず書房. (1964, Le Visible et l'Invisible, Editions Gallimard)
- 茂木健一郎, 1997, 脳とクオリア, 日本経済新聞社.
- 茂木健一郎, 1999, 心が脳を感じる時, 講談社.
- 茂木健一郎, 2001, 心を生みだす脳のシステム, 日本放送出版協会.
- 茂木健一郎, 2003, 意識とはなにか, 筑摩書房.
- 茂木健一郎・田谷文彦, 2003, 脳とコンピュータは違うか, 講談社.
- Northoff, G., 2004, Philosophy of the brain: The brain problem, J. Benjamins.
- 永井均, 1990, 他者, 市川浩ほか(編), エロス(現代哲学の冒険4), 岩波書店.
- 永井均, 1995, 翔太と猫のインサイトの夏休み, ナカニシヤ出版.
- 永井均, 2006, 西田幾多郎<絶対無>とは何か, 日本放送出版協会.
- 大森荘蔵ほか, 1980, 「心-身」の問題, 産業図書.
- 大森荘蔵, 2015, 物と心, 筑摩書房.
- Ramachandran, V.S. & Hirstein, W., 1997, Three laws of qualia: What neurology tells us about the biological functions of consciousness, Journal of Consciousness Studies, 4 (5-6), 429-457.
- ラマチャンドラン (Ramachandran), V.S., 山下篤子(訳), 2005, 脳のなかの幽霊, ふたたび 角川書店. (2003, The Emerging Mind, Profile Books.)
- Revonsuo, A., 2006, Inner Presence: Consciousness as a Biological Phenomenon, MIT Pr.
- Rosenberg, G.H., 1997, Rethinking Nature: A Hard Problem within the Hard Problem. In Shear, J.(ed.), Explaining Consciousness: The 'Hard Problem', MIT Pr.
- サール (Searle), J.R., 宮原勇(訳), 2008, ディスカバー・マインド, 筑摩書房. (1992, The Rediscovery of the Mind, MIT Pr.)
- Stubenberg, L., 1998, Consciousness and Qualia, John Benjamins.
- 鈴木敏昭, 2008, クオリアと意識のハードプロブレム, 理論心理学研究, 10 (1), 1-17.
- 鈴木敏昭, 2011, なぜよりによって「この肉体」が<私>

鈴木敏昭

だったのか, 四国大学紀要人文・社会科学編, 36, 103-131.

鈴木敏昭, 2012, クオリアの神経学的基盤, 四国大学紀要人文・社会科学編, 38, 75-111.

矢沢サイエンスオフィス編集, 1992, 最新脳機械論 (最

新科学論シリーズ20), 学研.

Zelazo, P., Moscovitch, M. & Thompson, E., 2007, The Cambridge Handbook of Consciousness, Cambridge U.Pr.

抄 録

本論文の目的はクオリア（感覚）の持つ絶対的一人称性の謎を考究することである。クオリアの絶対的一人称性とは感覚が他の肉体ではなく、「この肉体」でのみリアルに実感されることである。「この肉体」とはここでは筆者であるが、各人が同様に問うことができる。クオリアの絶対的一人称性は「なぜよりによってこの肉体が＜私＞だったのか」という「私」という現象（人格の根源的動作主）の独我論的特質（絶対的固有性）の源にあると思われる。すなわち人格の源は役割理論で言う「I」と「me」の相互的關係の成立にあるが、最初の感受性に由来する「I」はクオリアの特性を持っている。クオリアが発生する神経学的構造はすべての肉体に共通であるはずだが、もしそうなら、どのようにして他の肉体ではなく、筆者のこの肉体でクオリアをリアルに実感することになったのか。何か特別な「実感スイッチ」が入ったのか。偶然だとするなら、どういう偶然なのか。完全な偶然なら、同時期に生存する複数の肉体にそのスイッチが入ってもいいはずではないか。未だに謎は解明できないでいる。

キーワード：クオリア，感覚，ハーダープロブレム，絶対的一人称性